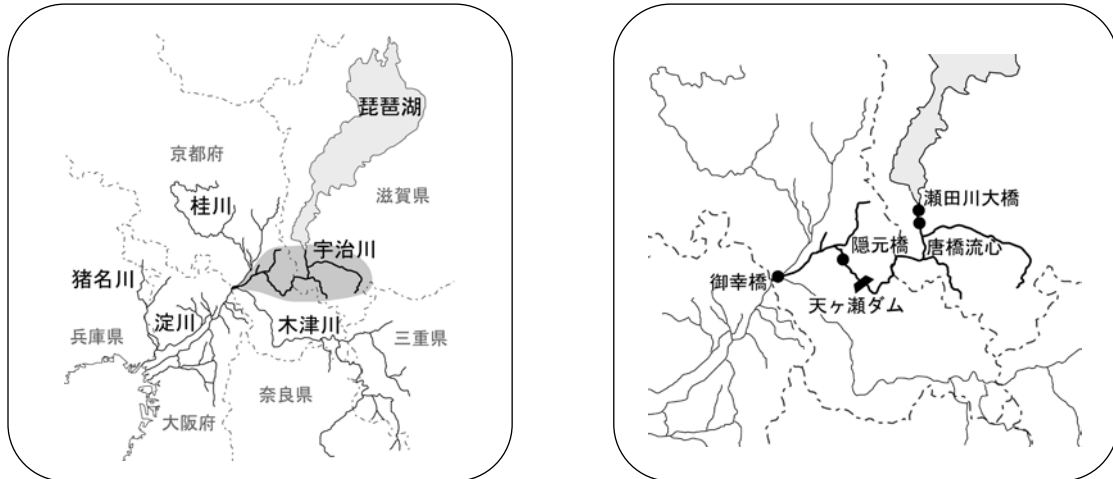


3. 宇治川

宇治川は琵琶湖から流れ出る河川で、上流域の一部は瀬田川と呼ばれている。上流域には天ヶ瀬ダム（昭和39年完成）が位置しており、琵琶湖の水質の影響を受けている。

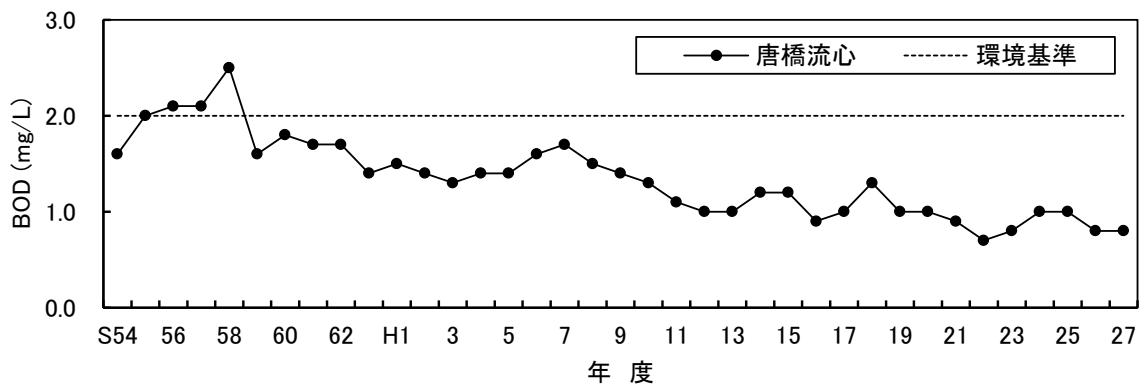
宇治川は昭和50年代に水質が悪化したが、上流は急速に改善され、下流は昭和60年代に徐々に改善されている。その後は横ばい状態にあり、上・下流とも環境基準を達成し続けている。



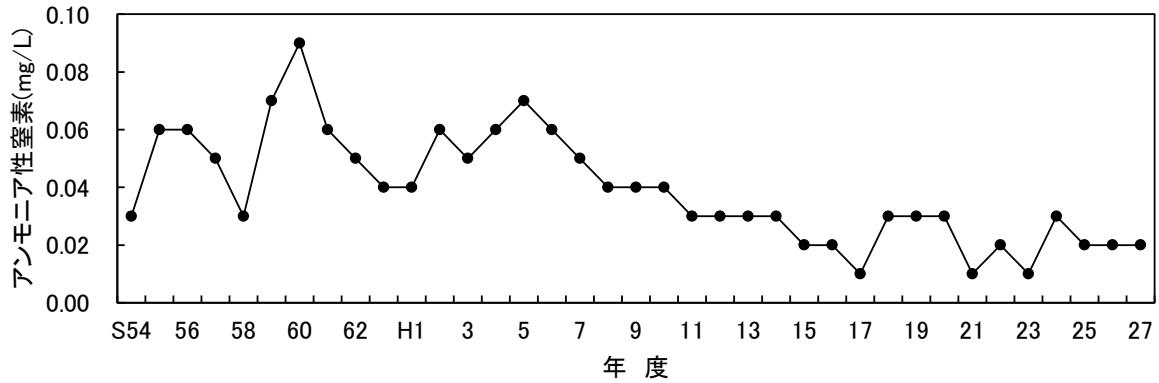
(1) 瀬田川

BOD (75%値) は減少傾向にあり、昭和59年以降は環境基準以下で推移している。平成27年度は0.8mg/Lと環境基準値(2.0mg/L)を達成している(図3-26)。

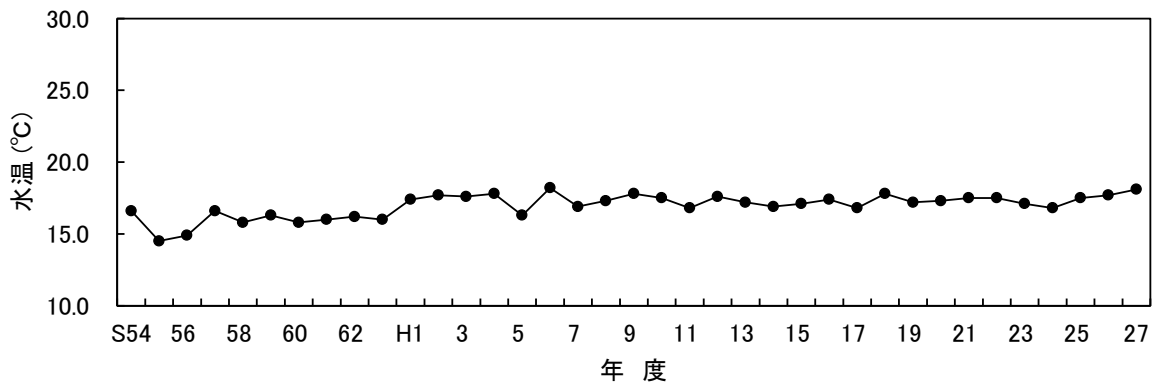
アンモニア性窒素(年平均値)も昭和61年度以降0.02~0.06mg/Lの低い値で推移しており、平成27年度は0.02mg/Lであった(図3-27)。水温(年平均値)については昭和50年代後半に比べ近年では高い傾向が見られる(図3-28)。



【図3-26 瀬田川(唐橋流心)のBOD(75%値)の推移】



【図 3-27 瀬田川(唐橋流心)のアンモニア性窒素(年平均値)の推移】



【図 3-28 瀬田川(唐橋流心)の水温(年平均値)の推移】

注) 採水地点: 表層地点 (図 3-26~27)、水深 0.5m地点 (図 3-28)

滋賀県「環境白書」より作成

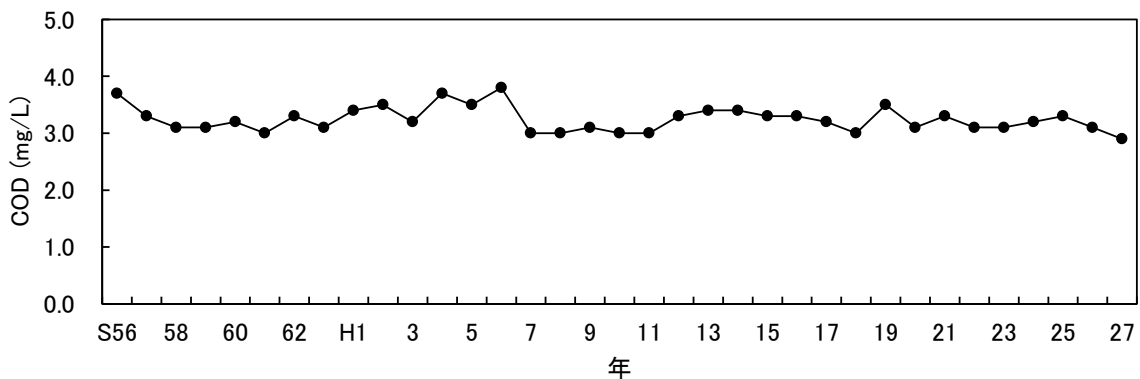
(2) 天ヶ瀬ダム

COD (75%値) は昭和 54 年ごろから高くなり、その後はおおよそ 3.0~4.0mg/L で推移している。平成 27 年は 2.9mg/L であった (図 3-29)。

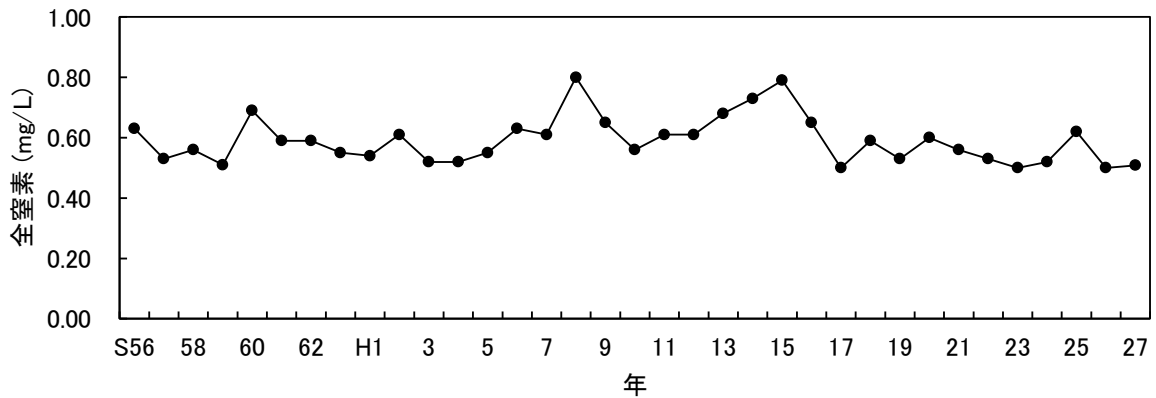
全窒素 (年平均値) は昭和 50 年に 1.02mg/L、昭和 54 年に 1.17mg/L と 1mg/L を超えたが、その後は横ばいで推移している。平成 27 年は 0.51mg/L であった (図 3-30)。

全リン (年平均値) は昭和 56 年に 0.045mg/L と高い値を示したが、昭和 57 年以降横ばいで推移しており、平成 27 年は 0.041mg/L であった (図 3-31)。

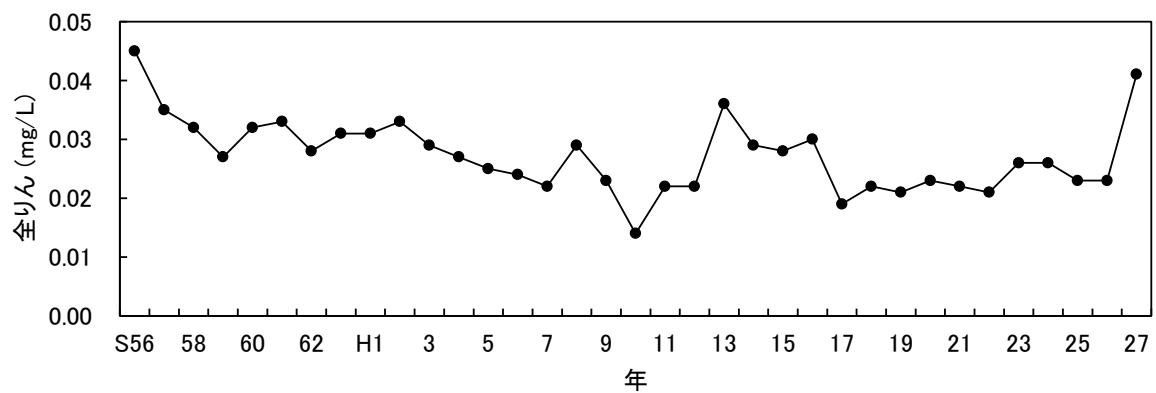
水温 (年平均値) については大きな変化は見られない (図 3-32)。



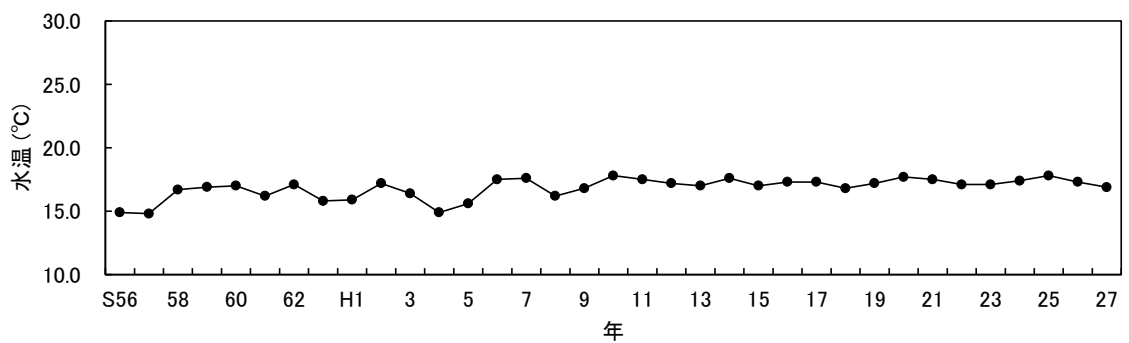
【図 3-29 天ヶ瀬ダム(ダムサイト)のCOD(75%値)の推移】



【図 3-30 天ヶ瀬ダム(ダムサイト)の全窒素(年平均値)の推移】



【図 3-31 天ヶ瀬ダム(ダムサイト)の全リン(年平均値)の推移】



【図 3-32 天ヶ瀬ダム(ダムサイト)の水温(年平均値)の推移】

注) 表層(0.5m)・1/2水深・底層(底上1.0m)の平均値(図3-29~31)、水深0.1m・0.5m・1.0m地点の平均値(図3-32)

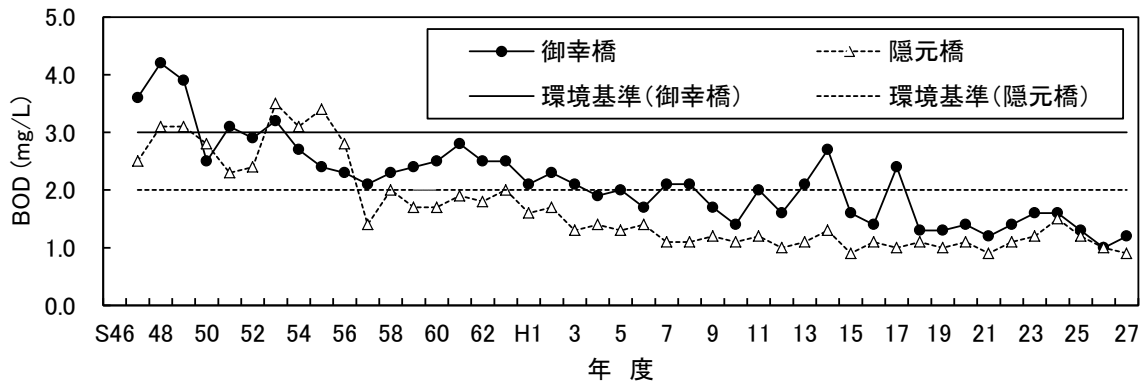
平成9~18年, 24~27年については国土交通省近畿地方整備局調べ
平成19年~23年についてはダム諸量データベースより作成

(3) 宇治川

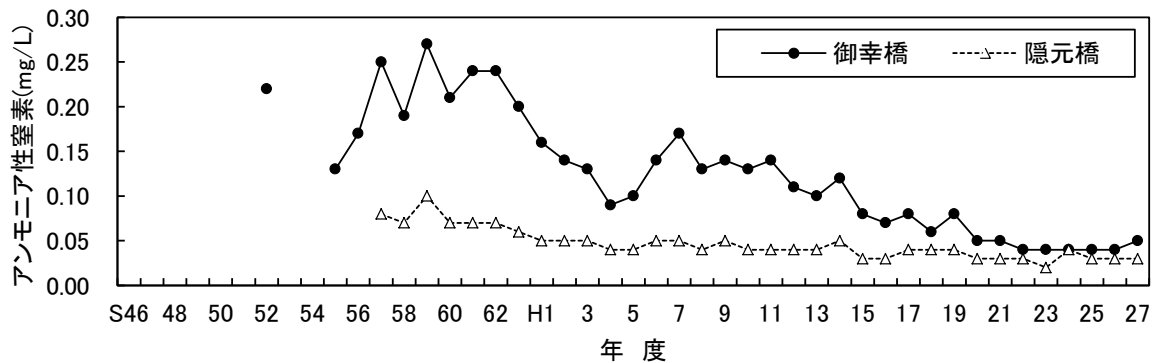
BOD (75%値) は御幸橋で昭和 50 年度以降減少傾向を示し、平成 27 年度は 1.2mg/L であった。隠元橋では昭和 56 年度までその下流の御幸橋より高い値を示したが、その後急速に改善され、平成 27 年度は 0.9mg/L であった。両地点ともに環境基準値を達成している (図 3-33)。

アンモニア性窒素 (年平均値) は御幸橋で昭和 59 年度に 0.28mg/L となり高い値を示したが、下水道の整備等にもなって、それ以降急速に改善された。その後微増したが、平成 8 年度からは減少傾向にあり、平成 27 年度は 0.05mg/L であった。隠元橋では昭和 57 年度以降は 0.10mg/L 以下と良好な水質を示しており、さらにその後の改善により、平成 27 年度は 0.03mg/L であった (図 3-34)。

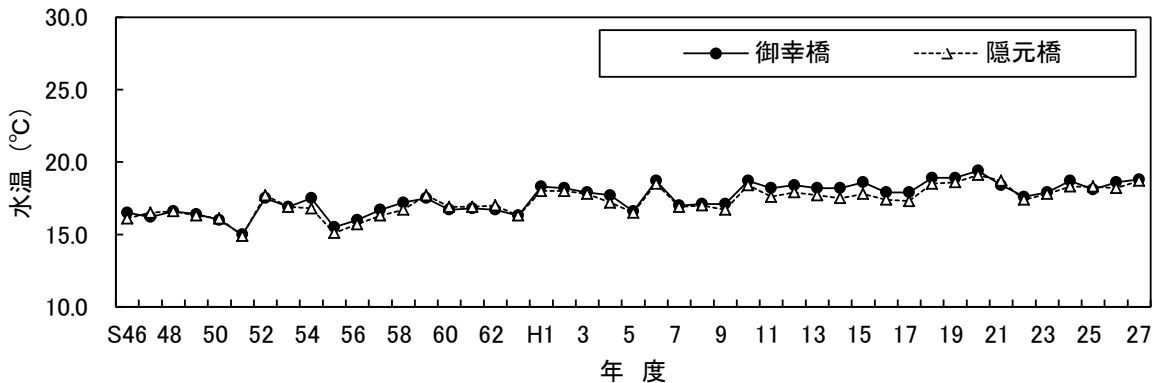
水温 (年平均値) については、上昇傾向が見られる (図 3-35)。



【図 3-33 宇治川の BOD (75%値) の推移】



【図 3-34 宇治川のアンモニア性窒素 (年平均値) の推移】



【図 3-35 宇治川の水温 (年平均値) の推移】

注1) 採水地点：水深の 2 割の水位

注2) アンモニア性窒素の年平均値は、報告下限値以上の日間平均値の年間平均値

京都府「公共用水域及び地下水の水質測定結果」より作成